

# な か ま

発行  
佐倉市立中央公民館  
な か ま 編 集 係

〒285-0025  
佐倉市 錦木町 198-3  
電話 (043) 485-1801

2 ページ	言葉探しの旅	塩田 倬雄	桜への想い	吉田 宣子
3 ページ	桜に思う	大沼 誠	年内立春	加瀬 清子

## ふらり

### 東武 幸子

とりあえず東京に出て大垣までの切符を買いました。前夜床についたときに、ふと「明日はどこかに出かけよう」などと思ってしまったのです。日常生活範囲にはない場所に行きたいと時々思うことを、実際に実行してみようと考えて眠り、朝早く東京駅に出たのです。夫は「できるかな？」なんて笑っていました。が、(仕事に出る夫と東京駅まで一緒でした)いざ独りになったらできるだろうかの気持ちも切符を購入した時点で不安もなく車中の人になりました。名古屋まで新幹線で行くかそれとも在来線一本で行くか迷いましたが、富士山をゆっくり見ながら行く気にもなり在来線に乗り込みました。

朝早くから呑気に旅に出る私は職場に向かわれる方たち少し後ろめたい気持ちでした。たが、それも陽が上がり車窓を流れる海・山の景色に、気持ちがどんと前にと向き、時刻表とにらめっこしながらついでに「どこか立ち寄れる所があるかな」と、地図の上で夢を広げている自分がいました。浜松に着くころにはさすがにお尻が痛くなり、新幹線を使うべきだったかと少々後悔もありました。

一日ずらして夜行にする手もあつたのですが、思い立ったが吉日とばかりに出てそれもまた良しかなと心の中でうなずく私です。浜松で乗り換えの時間を利用して駅弁を買いに走り、うなぎ弁当を購入。普通電車の中でお弁当を一人で広げるなどということをしたのは初めての経験ですから、「ドキドキ」やってみればできるものです。もつとも、味はどこかに飛びました。ここからは快速で二時間余りで大垣です。西に伊吹山・南に鈴鹿山脈を望む大垣は奥の細道の最終地でもあります。

天下分け目の関ヶ原の戦いでは西軍の石田三成が兵を置き、ここから出陣していきました。松尾芭蕉は江戸深川を曾良と共に出立し五ヶ月余りの奥州の旅の後大垣に着きました。揖斐川・水門川・杭瀬川などの河川を利用した舟運が盛んな地は芭蕉も居心地が良かったのでしよう。

「蛤のふたみに別れ行秋ぞ」の句を詠み、水門川船町港から谷木因らと桑名に下つた後も幾度か大垣を訪れています。そのころの夜の水路を照らしていた灯台が今も住吉灯台として残っているのはとても嬉しいことです。

今大垣市内には三二奥の細道があり水門川沿いに二十二基の句碑が建ち散策に最適でした。

(編集委員)

## 言葉探しの旅

英語の辞書を初めて手にしたのは今から五十年以上も前、中学校入学時に父が買ってくれたK社の初級英和だったと記憶している。その時の新しい紙のにおいが懐かしい。今手元にはその後求めた数冊の辞書がある。高校時代には短編小説の英文解釈に、学生時代には卒論作成の引用文献の翻訳等にと首つ引きで辞書に取り組んだことなど思い出される。職に就いてからも仕事柄、外国資料に目を通す機会が多く辞書は手放せないものとなった。

そんな思い出が沢山詰まっている辞書も退職後は利用することも少なく本棚にさびしく並んでいる。こんな状態で眠っている辞書の再活用方法がないか考え、英語クロスワードパズル(英クロ)への挑戦を思い付いた。すなわち「言葉探しの旅」の始まりである。

旅を始めて三年になるが、

これがなかなか面白い。出題は毎週一問、ヒントをもとに縦横合計約六十の単語を探し空間を埋める。中学や高校で習った単語もあるが、専門語や固有名詞など初めて知る単語も多い。記憶にあるものはすぐ思い出すが、新語はなかなか判らず探すのが大変である。ポケット版ではない単語でも机上版ではあったりと、この時ばかりは手持ちの辞書総出で探すことになる。全ての文字を埋めるのに早い時は数時間、遅いと数日かかるが完成時の達成感は一ひとおである。

パズルで見つけた単語は辞書に朱線を引き記録することにした。英クロ言葉探しの旅は始まったばかりだが、全ページを朱線の言葉で一杯にするようこれからも沢山の駅に停車しながら、楽しい言葉探しの旅を続けていきたい。

(中志津 塩田倬雄)

## 桜への想い

今、私は日光輪王寺の樹齢五〇〇年の、染井吉野を見上げています。ボロボロになっても横から新芽を出して、花を咲かせる生命力に感無量です。

おもえば昭和二十七年四月一日、小学校の入学式、前日から雪が降り、薪ストーブだけの寒い中、式が終わって帰るとき入学記念として頂いたのが桜の苗木でした。前年度は桐の苗木だったそうです。池の側に植えてくれた桜、父がトラックのタイヤチェーンで作ってくれたプランコで子供心に私の桜と、いつもそこで遊んでいたような気がします。

大人になって、ふるさとを離れ、帰郷するのは桜の咲く五月の連休と決めていました。一年に一度が、二年に一度、三年に一度となり、今ではなかなか帰れません。

戦後の大変なとき、将来花のある世の中にと願った大人の気持ちは今ではわかるような気がします。

市民カレッジに入学し、一年のとき、桜を植える会に入会しました。また二年のまちづくりには、公園に桜を提案したとき、カレッジで友達になったHさんに、なぜ桜なの？と言われたとき、東北人特有の自分のことを、あまり話したがらない性格が出てだまってしまいました。ここでHさんごめんなさい。

今は、まちづくりで植えた吉見台公園の桜を、市民カレッジ入学記念と心の中で思い成長を見つつ、また私のことをずっと、見守ってもらいたいと思っています。

(染井野 吉田宣子)



## 桜に思う

旅を生涯の友とした松尾芭蕉は咲きほこる桜を見つめ、「さまざまの事思ひ出す桜かな」の句をよんだ。

冷たい冬に耐えて春のぬくもりにつつまれてみると、ふくらむような期待を心にいだかせる。それはさまざまな思い出をとまなうことで深い期待になるのかも知れない。

その春を象徴するのが桜である。桜は牡丹のような貴禄はなく、椿のような強靱さも無い。また梅のような馥郁たる香りもない。しかしいつせいに咲き乱れる姿や、潔く散る花びらの風情に、おいたつものを感じさせる。

山の端に霧が流れ、薄暗い木立の中の山桜が朝日に映えていく姿は、本居宣長の「敷島の大和心を人問はば朝日に匂う山桜花」の歌を思いだす光景である。夕映えのなかを散る桜の花びらは、その一枚

一枚が頬紅を染めたようでも『古今和歌集』のなかでも多く歌われている。

暗い夜空の下、わずかな灯りにも驚くほど広く浮かびあがる夜の桜、雨にぬれながらも誇らしげに咲く桜には哀れさもただよう。

「におうような」というのは、美しいと感じるものを強調する言葉となっているが、咲きほこる桜を表すもつとも適切な言葉かも知れない。それは気配というか感覚的なものである。日本人が自然の四季の移りかわりのなかで、感性を豊かにしてきたことから生まれたものであろう。

最後に小林一茶のほほえましい句をひとつ。「露の葉に煮しめ配りて山ざくら」

(千成 大沼 誠)



## 年内立春

岡本先生は、「今年は閏年ですなー」(でも、閏年に関係はありません)という言葉を言外に匂わせながら、黒板に記されていた。

三日 節分

四日 立春

七日 旧元日

そして、私達受講生の方に向かれ、言葉を続けられた。

「今年は、年内立春です。古今集に『在原元方』の歌があります。年の内にー」と、おっしゃりながら「年の内に春は来にけりーとせを去年とやいはむ今年とやいはむ」古今集 在原元方 と黒板に書かれ、更に

「万葉集最後の歌に、大伴家持が、『年内立春』を詠んでいます」と板書された。

「新しい年の初めの初春の今日降る雪のいや重け吉事」の一首をー。

戦時中は、勤労奉仕に明け

暮れた女学生であった私が、実質的に万葉集を知ったのは、戦後短歌に魅了されたからであつた。

ある年の元旦、低く垂れ込めた雪空を仰ぎながら、降り始めた雪を手を受けていた母が「今年はいいい年になりそうよ」とにこにこした。雪は害虫を死なしめ、豊作をもたらす瑞兆であるという。

明治三十年に生まれ、小学校へも行かなかった母に、家持の歌を告げた。頷きながら聞いていた母であつたが、耳に届いただけであつたかー。

家持が、元方が「年内立春」を詠んだことは、旧暦があつたからこそで、旧暦のある潤いに似た思いが胸に広がった。「年内立春」と繰り返す。何という豊かで煌煌しい言葉であることか。そして希望に溢れた言葉ではないかと思う。

(白井 加瀬清子)

## 4月の黒板

### 『なかま』原稿募集のお知らせ

『なかま』の2・3面は、市内の皆様の投稿によって作られています。原稿は随時募集しています。

**【原稿規定】** 字数 650字(13字×50行)以内。ワープロによる原稿(縦書き)でも結構です。

内容 随筆・・・日常の出来事、生活の中で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などご自由にお書きください。

『なかま』に対するご意見・ご感想などもお待ちしております。

いただいた原稿は、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただきます。

**問い合わせ** 佐倉市立中央公民館 (第2・第4月曜日は休館日です)

**電話** 485-1801

**URL** <http://www.city.sakura.lg.jp/kominkan/cyuuou/index.htm>

### わくわく道

四月はピカピカの一年生。新社会人として桜色に染まり希望に満ちた出発の月ともいえるでしょう。ふと愚にもつかないことを思い、なぜピカピカのと表現するのだろうか？上から下まで真新しい服を着せて貰い、ピカピカ光るランドセルを背負い親の期待を一身に受けて、ということでしょうか。また学生時代とは打

つて変わり、縦の関係も複雑になり仕事の責任の重さを感じながら社会人として生きていく第一歩！ それなりに抱負を胸に入社式を迎えられたことでしょうか。それにしても世相は餃子の毒入り騒ぎ、いろんな所で問題が明るみになると三人ぐらい並んで「すみませんでした」と頭を下げ、税金は我が金とばかりに使い込む。次の世代の若人に大人としてのお手本となる行動をと願う毎日です。

### あがとき



今月三十日は図書館記念日です。わが国で図書館法が公布されたのは昭和二十五年四月三十日でしたが、四十六年に開かれた全国図書館大会でこの日を図書館記念日に定め、翌四十七年から日本図書館協会が実施してきました。佐倉市に市立図書館が開設されたのは昭和五十一年ですが、市内の図書館には多く

の人が出入りし図書の閲覧や借り出し返却に賑やかな風景がみられます。図書館には、地元の人たちが執筆編集した本や資料がまとめて置かれています。郷土資料ともいべきものです。図書館に行かれましたら、郷土資料に目をおすのも楽しいものです。なお、『なかま』も郷土資料の一つとして今後ともご愛読願います。併せてご投稿もお待ちしています。

(金井)